

発行日 \*\*\* 2013年5月1日

e-mail: akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

Tel 072-681-8870

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*



## 村祭り

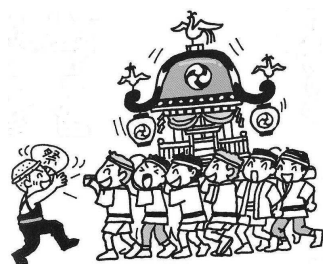
村には神輿がなかった。小さな神社があつて春と秋には祭りがあつたのだが神輿らしきものはどこにも見当たらなかった。私が小学生になって同級生の家に祭りだからと誘われて遊びに行った村には大きな神輿があつて、大人たちが勢よく担いでいた。その様子をみてどうしてわが村には神輿がないのだろうかと思ひに思つたものだ。

氏神様に参る、ただそれだけが村の祭りの行事なのであつた。神輿も太鼓も何もない殺風景な祭りである。村の氏神さまには、小さな社殿と脇に舞台を備えた板間の小屋があつた。小屋の中には大きな囲炉裏が掘られていて、まつりの時など大人たちが板間にムシロを敷いて囲炉裏で火を燃やして持参した煮しめを肴に酒を飲んでいた。

先日、友人が出演するからと誘われて、バッハのミサ曲を聴きに行った。大きなコンサートホールで奏でられる楽曲に荘厳の趣はあつたが、音楽にとんと興味のない私には退屈気味であつた。演奏を楽しむということはできなくとも出演者の熱心な思いは伝わってきた。音楽に疎い私は聴き入って味わうということを知らないためか、ただ聴きながら退屈しのぎに文化と言うものについて思ひをめぐらした。文化といわれるものは、金とヒマがなければ生まれないと思う。わが村は、文化を生み出すにはあまりに貧しかった。人も少なく余裕も無かつたのだ。

神輿のあつた友達の村は戸数も多く金もあつたに違いないが、それだけではないはずだ。村人の中に神輿をみんなで担ぐことによって、村人の心を一つにまとめ活力を生み出す文化の力を知り、村の更なる発展を願つた人達がいたにちがいない。金をかけて神輿を作り神に奉納する祭りに村人のまとまりをかけたのだ。神事に限らず文化が持つ力とは人を集め人に元気を与える事なのだ。

私が入院中に多くの方々から、見舞いや励ましをもらひ元気になったのも「芥川だより」を発行していたからである。ささやかではあるが、この「芥川だより」も小さな情報発信の文化である。このミニコミ誌を媒介として人々が心を寄せ元気を感じていただければ嬉しい。(嘉)



## 連載 爺捨て山 45

梵店主

昔の貴族は糖尿病で亡くなる人が多かつた、と本で読んだ事がある。

先日、麻生副総理が「好きなだけ飲み食いし糖尿病になつた人の治療費を税金で払うのは如何なものか」と発言していたが、私も自分の不摂生を棚に上げて言えば同感である。

入院中、同部屋の人とは私以外、全て糖尿病の患者であつた。彼らの悩みは、糖尿食と言われる、極めて少量の味気ない食事であつた。血液検査と日に7回の血糖値検査で食べたものが直ぐ検査結果に出る始末で、人目を忍んで食べる訳にはいかなひ。

私も、服用していた薬の副作用と、病院食の少なさの為か、非常に食欲が強くなつて病院のレストランへ通つていた。当然の結果として、肥満が進行し、今も、医者から糖尿だ、肝炎だと脅かされている。

目の前に食べ物があつて食べられないのは、無くて食べられないよりも辛いだろうと思う。私の軟弱な精神力では、到底辛抱が出来ないから、目につく処にあるものは、無くなるまで飲み食いするにちがいない。

爺捨て山ではそうはいかない。無くては食べられないからだ。

## クラス会で

想い出話をするには同じ時代を生きた人同士に限る。年々欠けてゆき、残っている人も、私も記憶があいまいになり、耳も遠くなり、話が進まない。そんなことあったか知らんよう覚えとってやったなア、という。

ボケてきたのか、まだらボケなのか。それぞれに勝手に話に花が咲いてゆく。それが楽しく、又一年たったら、クラス会。

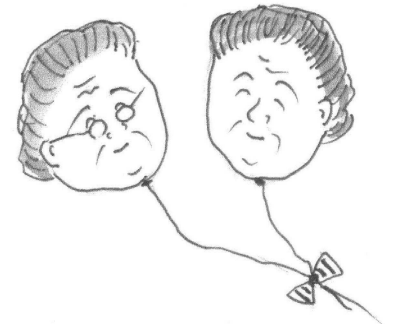
私もその頃は、ヤンチャだったらしい。担任の先生に、アダ名をつけて、暗号のように生徒が楽しんでいたらしい。

いまだ覚えているのが、タヌキ、動物の名前、顔にあっているのだから仕方がない。タヌキの先生は知らんのだから面白い。教室へ来る足音がすると、「タヌキが来た」と合図がある。いっせいに静かになる。

クラス会でそんな話をして、ああそう、そんなことあった。先生も感じていたのか同じ人を廊下に立たせていた。

教室でも先生の話なんか聞いていないのだから。きっと常習犯にされたいらしい。

「廊下に立たされるのは、いつも自分ばかりや」叱られ役、廊下に立た



されることも馴れてくると、ふてぶてしくなつて、平然としていた。元氣らしいけどクラス会には姿を見せなくなつて淋しい。

タヌキ、あだ名のつけ役は、あんたや、指名しをした人、なつかしい。

あだ名をつけられた先生は、もうとつとくにあの世ゆき、安らかに眠っていられるだろう。

## 久し振りに

社会人になつての一年生、息子夫婦と孫に「美味しいものでも食べにゆこうか」と声をかけたのも私、相手の都合も聞かずに、さっさと行動に移してしまうバアさん。

「何がいい」「何でもいい」「とにかく行こう」。息子夫婦と孫、若いだけに足が早い。はぐれないようについて歩く。

「金は私が払うのだから」腹をくくって歩く。ぞろぞろと行き交う人、その人た

ちが手にしているのが、ケイタイ電話、前に突き出して高く上げている。

「何しているのや」「知らんよ」孫は言う。息子が振り返つて「こんな人混みの中でしゃべったら、またこけるで」と言う。ああ疲れた。

家でねころがってテレビでも見ているのが正解だったわい。やっと見知らぬ店の前へ着いたら、その時はじめて笑顔を見せた。

「バアちゃん、ここの店美味しいやで」孫の顔。

目の前へ次から次へと出てくる。どうして食べたらいいいのか分からへん。

孫が「セツトになっているから、食べたらここへ出すのやで」と言う「ああ満腹になった」「お手上げや」と言う。と他のお客さんまで笑う。この親子は、どうも常連らしいな、と初めて気がついた。

息子に電話すると、「さすが親、よいところを見ている。エスカレーター乗り降り、食べ方など教えてくれたやろ、必ず手をそえて気がつくことはつくのだよ」と言う。

しかも、あんなふうでは、恋人も出れないだろうなあ、デイトしよう、電話番号教えてとはいわれないうらぬ心配ばなし、私もよいところを見ようと目を閉じて努力した。

ああ美味しかった。

## 俳句

土田 裕

うなだれて人待つまに君影草  
街を行く乙女の美しき薄暑かな  
木陰ばかり選びて歩く立夏かな  
土つけて筍つつむ新聞紙  
遠き日や摘みては食みし草莓

## 編集後記

五月晴れの日々が続き、陽気もよくて、私の体調も気分も上々で皆様に感謝しております。

ありがたいことに、友人たちが、何かと心配りをしてくれて、色々なところに連れ出して楽しませてくれます。昨日は、大阪・食博へ行き世界の食べ物を見て、ドイツのビールを堪能してきました。アルプス楽団のソプラノ歌手がジョッキ片手に歌う乾杯のドイツ民謡を聴きながら、ドイツの酒場を思い出しました。

大阪駅北側に新しく出来た商業施設グランフロントのバーや中華料理も食してきました。案内してくれた友人は「まあ、三年やね」「そうか、三年で閑古鳥が鳴くか」そんなやりとりをしながら、私は、昔の鳴り物入りでオープンした「つかしん」の事を想った。

## 《闘病記》 4

## 美人医師

梵店主

指定のあった7月20日、よっちゃんは、大学病院へ行き、入院受付で手続きをし、指示された病棟の12階にあるナースステーションへ行き名前を告げた。

すぐに看護師が対応してくれて、ステーションの真向かいの病室に案内された。

四人部屋の廊下側のベットであった。

よっちゃんは、一瞬「えっ、間違ってるやないか」と思った。個室の良い部屋に入院させてもらえるという先入観があったからだ。家内いわく、「個室だと気が変になるらしい。相部屋だと話し相手もできて、楽しく入院生活ができるのよ」という。家内の知り合いの主人が個室に入院していた為に、奥さんは毎日、旦那

の話し相手を何時間もさせられ困ったという。このことを理由に家内は相部屋に限ると言って譲らなかったのだ、入院が初めてのよっちゃんは、そんなものかと納得していたのではあるが、いざ相部屋に入るとかなりの違和感を覚えた。

しかし、気持ちの切り替えの早いよっちゃんは、ものは考えようだと考え直した。この狭いベットの空間は、山のテント生活に比べれば、天国だ。雨や雪も降

らず、風も吹かない。氷点下になって凍えることもない。二十四時間、若い看護師と

医師が介護にしてくれる。もちろん怖い先輩もいなければ、仕事の心配もしなくてよい。催促の電話もかかってこない。ここは、天国みたいなところなのだ。そうだ、きっと天国なのだ。よっちゃんの気持ちは、相部屋の息苦しさを山登りの生活を思い出すことによって、難なくクリアしたのである。

しかし、病気に対しては限りなくブルー、いや開き直った灰色であった。病名は何とか見当がついたが、その先は全く見えず、大学病院といえども、よっちゃんにとっては信頼するにあたらしいなかったのである。

よっちゃんが、案内されたベットで寝ていると、担当する看護師が挨拶に来た。「これから、担当医師と今後の治療計画について説明がありますから、別室に来て下さい」と言った。よっちゃんは、ベットから起きて、相談室へ行くと若い細身の小柄な可愛いらしい女の子がいた。看護師が病棟でよっちゃんを担当する医師だと紹介された。外来でよっちゃんを担当した医師と入院患者を担当する病棟医師は違うのだと説明された。

説明を受けながら、よっちゃんは、こんな若い美人医師と看護師が世話をしてくれるのかと半信半疑に思われて、ひよつとして、自分があの世に来てしまったのでは

ないかと疑ったほどである。

医師は、よっちゃんの病状について聞いてきた。よっちゃんは、ハイテンションになった気持ちを抑えきれず、ある事ない事を支離滅裂に喋り続けた。そんなよっちゃんの口調に医師は、一言も口をはさまず嫌な素振りもみせず熱心に聞いてくれた。時折見せる優しい心遣いを感じさせる目の動きを見ながら、よっちゃんの気持ちは一目惚れするかのようになり、この娘はいい子だ。この医師はすばらしい、と思い込むのである。

単純なよっちゃんは、その時直感した。素晴らしい女とは、気配りが出来て、優しくて、話を丁寧に聞き、その上、人間的な可愛らしさがあること。最後のひとつは素朴な素直さである。馬鹿と思える人に対しても素直に耳を傾ける心根である。

よっちゃんの気持ちは、病気がどうなるか分からない開き直りから、この先生なら結果がどうなるうとも、言われる事は素直に聞かなければならないと、不思議にも自分に言い聞かせたのである。この医師は、よっちゃんの思った以上の才媛であった事が、後に同僚の医師の話から判明した。

入院二日目から、よっちゃんの闘病生活が始まるはずだったのだが、二日の外泊を経て4日目から2週間に及ぶ検査が待ち構えていた。

— 昭和女、どっこい日記 —

## 知られざる無法地帯・阿波座

人は案外、自分たちが住んでいるところ以外の場所については知らないものだ。大阪の西区に「阿波座」という地下鉄の駅があり、その周辺が無法地帯だということをも多分、人は知らないと思う。一見、市内によくある、オフィスとマンションと商店が入り混じった、普通の町、阿波座……

去年から、阿波座駅そばに、大型マンションの建設が進んでいて、NHKの朝ドラ「カーネーション」の主役を演じた尾野真千子が「あわぎ、ええやん」などとつぶやく宣伝もあったから、ご存じの人もあるかもしれない。「大阪のビジネスの中心地、本町からひと駅、歩いてすぐの場所に、緑豊かな鞠公園が広がって、散策にぴったり」。

ま、うそじやあないけど、阿波座はそういう「ええやん」なときと、「なんじや、こりやあゝ」と叫びたくなるときと、二つの顔を持っているのだ。「阿波座に何が？」と思ってくれた、アナタ。今から読むことを口外しないと約束していたきたい。でないと、私、南港に無残な死体となって浮かぶかもしれないから。善良な一般市民の変死体であっても、警察は調べもせず犯人もあげない

可能性がある。犯人というか、犯人の所属する団体とことを構えたくないからだ。しかも、私の命だけではすまずに、掲載した「芥川だより」の編集長にも迷惑がかかるかも。

うそだ、冗談だと思う人は、「アレ」を知らない人たちである。阿波座は、「アレ」の集積地というか、活動の地というか。「アレ」とは、そう、右翼。時代遅れの、装甲車みたいな車に日の丸とか付けて、車の窓ガラスは濃い黒で、中を見えなくしてあるんだけど、たまに乗ってるおっさん、兄さんが見える。これがはつきり言って、首が太い、いかにも格闘技が何かをしていそうな、民間人とは一線を画した風情の「こわい人たち」。

一人や二人、街宣車の一台や二台なら、いいんです、この年だから、こわいとも思わない。だけど、阿波座は「集積地」。いざ、出陣してこられますと、三〇台ぐらいは連なるのだ。数えてないから正確にはわからないけど、ズラズララーッと大音響の街宣とともに、同じ場所をしつこく、あざとく、グルグルグルグル。こわいよ、うるさいよ。

「君が代」や、進軍ラッパ（ちゃんちやちゃんちやちゃんちやちゃんちやちゃんちや）を大音量で流しながらやって来て、軍歌や演歌、それ

も何故か音程の外れたような聞き苦しい音を流して、大音響で演説だか罵詈雑言だかわからぬ言葉を浴びせる。どこに浴びせているか、「中国総領事館」に、である。

あるんですよ、阿波座に。阿波座は最寄りの駅名で、総領事館の所在地は鞆本町なのだが、この辺の人は、「どこに住んでいるのか？」と聞かれたら、「阿波座」と答える。だから阿波座だ。総領事館があると聞けば、私は治安のいい、高級住宅地を連想してしまうが（これは多分、大使館と混同しているせいだ）、中国総領事館は違う。というか、阿波座は違う。総領事館の斜め前にあるのは、スーパーマーケットの「ライフ」。「二階建てで、「ライフ」のなかでも小さい規模のスーパーで、私を含め近所のおばちゃんやが自転車で買物に来る、食品がメインのスーパーだ。ほかに老人専用の介護施設やマシオンやらパン屋さんやら美容室がある、大阪の、ごくごくありふれた町の一角に中国総領事館は建っている。

一日二四時間、警察が護衛をしていて、コンテナのような車がピタリと領事館の脇に止まっている。要所要所にお巡りさんも立っている。

ここに向けて、街宣車が集結し、大音量のシユプレヒコールを繰り返す。「中国、出て行け」と。いまだき、シ

ユプレヒコールなんて古いし、そもそも、猪の首のおっさんがだみ声を張り上げて、拡声器で「中国、帰れ」などと叫んでいる状態を表現する言葉として、シユプレヒコールは変だ。自分で使っていてなんだけど。

ここで、お断りしておくが、私は言論の自由は認める。おっさんらのパンチパーマか角刈りという髪型その他存在自体をいただけない、嫌いだとは思いますが、彼らだって私のことを知っていれば「けつ、ブサイクなオバハンがモノ言うな、空気吸うな」と、まあそう思うでしょうから、お互い様だ。

問題は言論になっていない、ということだ。がなりたてて、わめきちらしているの、何を言ってるのか、わからないのだ。うそだと思う人は、阿波座に来て、いっぺん聞いてほしい。

厳密に言うと、拡声器で流す演説（一応、そう言つとくが、実態は絶対に演説ではない）には三種類ある。「近所の皆様にはご迷惑をおかけしますが、尖閣諸島における中国のこのような暴挙を我々はあ、許すことができないのであります」と、理路整然、聞き取れるヴァージョン。これだけならまったくの言論の自由。二種類目、何を言ってるんだか、最初から最後まで本当にさっぱり聞きとれない大騒音。三種類目、聞き取れる言葉が混じる、罵詈雑言。「何が、うる

さいじゃ〜こつら〜」「殺すぞ〜」。勇氣ある住民や中国領事館を警護するボンクラおまわりども（あ！失礼。でも、全然、制御してないから、ボンクラ呼ばわりされて当然だ）に向けられている言葉が家の中に居てもががんと響いて聞こえて来る。警察は、この騒音を取り締まらない。領事館に近づかせないようにガードはしているけど。

これが無法地帯でなくてなんだというのだ。ボンクラではない警察官がたまにいて、小競り合いを起こしているが、全体を取り締まることはない。

何年か前の夏、私は自転車に乗っていて、たまたま一台の街宣車の窓が開いていたから、「やかましい！ここに病院もあるんですよ、静かにして下さい」とどなったことがあった。思えば、無謀である。車の中には三、四人乗っていて、明らかにびつくりしたらしく、「やかましい」と言うとおんぞ」と顔を見合わせていた。意外に、普通の反応だったが、報復を恐れた私は、そのまま自転車で走り去り、ライフに逃げ込んだ。住まいを知られたくなかったが、本当は、追手もかからなかったが、用心にこしたことはない。阿波座に住むって、とってもスリリングなのだ。（AO）



## お詫びと訂正

「芥川だより」75号の3ページ目、下から2段目の一番最後の行の「いくつか手前の駅で」から一番下の段の9行目の「社長にらむ」まで、編集のミスで読みにくくなっていました。訂正しお詫び致します。

## 〈訂正文〉

とカン違いして、いくつか手前の駅で下りてしまったという、ささいなおつちよこちよいが原因だ。マヌケである。でも、この瞬間においては、おのれのマヌケを呪っているヒマはない。

タクシーで山道をうねうね走って、米子まで、1万6千円。もちろん、自腹。会社が出してくれるのは、大阪―米子間のJR料金のみ。一応、領収書をもらい、社長に「手前で、降りちやいましてね」と説明しかけたが、「そりや、しやあないな。ご苦労さん」と、交渉を打ち切られた。

おつちよこちよいは、本当に苦労する。お金も貯まらない（これは、別の問題があるかもしれない）。ときには、命の危険もはらむ。

## ぼけ防止のために

明石 幸次郎

A君「明石さん会社辞めてから今、何をしていますの？」

明石「まあ、卒業してからずーと勤めていた会社を、思うところがあつて、早い目に辞めて、ブラブラしていたんやが、今は、その会社にいた後輩が脱サラして、会社を興し、売り上げが増えて、自分一人では手が回らないので、頼まれて手伝っているんや。給料〇分の1、反対に責任〇倍、しんどさ〇倍やで。女房曰く、『以前の会社に居た頃比べ、ずつと真剣に働いて、家に帰って来たら疲れ切ってしんどそうやね。前の会社でもっと真面目に働いていたら、楽して良かったのと違う』と皮肉られているんやで」

B君「何でまた、エエ歳してから、そんなに真面目に働き出したんですか？ それやったら、以前いた会社で定年までサラリーマン道を、真面目に全うした方が奥さんの言われるようにホンマに良かったのと違いますか？ 後輩の会社を手伝うと言うより、足引っ張って、その後始末でしんどいのと違いますか！」

明石「エエ恰好で言う訳やないが、

くそ面白くもない仕事を自分を曲げて無理して定年まで続けていれば、ストレスが溜まり、それこそ定年になった途端に癌が発見され体調を崩して、あの世行きとなつていいるのと違うかなあ。早く辞めたお蔭で？ ストレスも溜め込まずに、前の会社で出せなかったエネルギーのようなものが溜まっていた、それを今の会社で吐き出しているのかも知れんわ。まあ、俺もこの歳になつたので、少しは考えてから行動しているわ。使命感というものか、勝手に思っているのやけど。まあ、後輩の足を引っ張る前に辞めるつもりやけど」

A君「ところで、S先輩が明石に会ったら、芥川だよりにまた寄稿するよに頼んどいて、と言つてましたよ。『俺が言つても、分かった、分かったと言いながら、もう、4か月も経つてのに、全然原稿出して来ないんや。アイツなら、サラリーマン人生で、沢山の失敗をやらかし、会社に言えない話を秘めているはずやで。それを吐き出したなら、すつきりすると思う。アイツのためにも書いた方がエエと言つておいてくれ』と言われてましたよ。そう言えば三十歳代で十年位海外の仕事

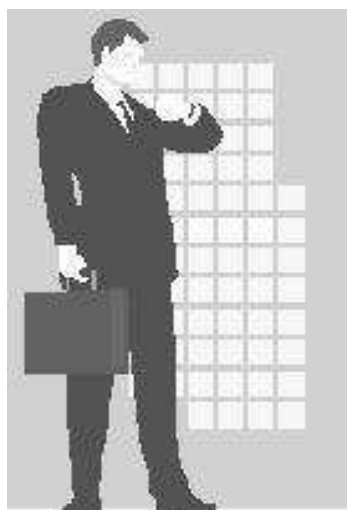
をされていたんですね。S先輩が期待している面白い話があるのと違いますか？ 明石さん、前の会社を辞めても

う何年ですか？ 早く失敗談を書かないと呆けて書けなくなりますよ。呆け防止のためにも毎月義務的に、面白くない原稿を書くのも明石さんらしくエエじゃないですか。誰も明石さんが書いたものなんか、読みませんよ！」

明石「まあ、それもそうやなあ。ストレス予防のために、後輩の会社で働かせてもらい、その上、ぼけ防止のため、下やんに原稿を書かせてもらう、有難いことやなあ。来月から書くので、君ら、芥川だよりを来月号を百部づつ買うことと、これからは、原稿の督促がてら、酒を飲みに行こうと毎月誘つてくれや」

B君「S先輩はどうします。難病を患い、大変なようですな。酒なんか誘つても来られないのではなですか？」

明石「何を失礼なことを言つてるんや！ 下やんが酒を断るのは、余程の時やで。断る訳はない。まあ、断つた時は、覚悟しておかないといかんなあ」



#### 4. 28 政府「主権回復」式典と 沖縄「屈辱の日」大会

4/29の朝日新聞朝刊にはこんな見出しでそれぞれの集会が対比されて記されていて朝日もがんばっているなと感じました。「61年前の4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効し、アメリカを中心とした連合国の占領から脱した。沖縄、奄美、小笠原はそのままアメリカを中心とした占領下におかれた」と説明がありました。しかし現在日本が本場に独立国として存在しているのかという首をかしげたくなります。ある友人は日本は将来アメリカの州になるか、中国の属国になるかどちらかだと究極の選択を言っています。沖縄の集会では土地を基地に取り上げられ、アメリカの基地がのさばり、人権を奪われる事件が多発している状況をまねいた屈辱の日であるとしてスピーチされていたが、その通りだと思います。2年前に自民党で4月28日を主権回復記念日にする議員連盟がつくられ、その趣意書には「主権回復した際に、本来なら直ちに自主憲法の制定と国防軍の創設は主権国家として最優先課題であった」とあるそうです。主権喪失の時代に押しつけられた日本国憲法を占領憲法として変えたいねらいが見えます。

国防軍の創設も入っているに驚きますが、なぜ主権回復の日を持ち出してきたのかが見えてきます。これだけアメリカのいいなりになっている日本の現状を直視し、独立国として当然の要求をしていくのが今の政府のやるべき事だと改めて思いました。

(熊吾郎)

システムの！と叫んでみれば……

大江雉兎

この文章を書いたのは、村上春樹の新作長編『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』が発売された頃だった。当然のことのように、すぐに増刷が決まったのだ、売り切れ店続出だのいったニュースが流れている。この文章が人目に触れる頃とは「芥川だより」の次号が出る頃のことなのだが、その頃になっても、まだベストセラーランキングのトップに居座っているような勢いだ。『1Q84』の時もそうだったのだが、販売開始直後のパニック的なムードが一段落してから古本に手を出そうとしている私などは、まだ読んでもいいはずだ。新作が出たからすぐに読まねばならないとばかり煽り立てるのは、出版業界の思惑以外の何物でもない。

こうしたことを書き始めると、まるで村上春樹を軽薄なブーム型作家だと言って否定しているようだが、実は逆である。初めて読んだのは『1973年のピンボール』で、続いて『風の歌を聴け』と『羊をめぐる冒険』。それらの作品が話題となった時期が過ぎて文庫になった段階のことである。書店の文庫コーナーで、そういえば数年前にそんな名前の人が話題になっていた気がするな、といった程度のノリで手を伸ばしたのが最初だった。

誰とは言わないが、たとえば「平成の三島由紀夫」とかのキャッチコピーをかぶせられ、作られたブーム臭さ。ぶんの中でもてはやされた某作家なども、その作品を読むには読んだが、響くものは何もなく。そうしたタ

イプの「大型新人」が多い中で、『1973年』と『風の歌』は明らかに風合いが違っていた。あの独特の文体にはすぐに毒されてしまったのである。ただ、それでも、だからといって、ノーベル賞がどうたらとか、発売前に増刷がなんたらとかの騒動を聞くと、うすら寒いものも感じてしまう。基本的には好きな作家で評価もしているのだが、付かず離れずのほどよい距離感を保っていた存在なのである。

といった具合で村上春樹論議から切り出したのは、なにも新作のことをあ

れこれいうためではない。今回のテーマに取り上げた「システム」なる言葉を考えるにあたって、村上春樹の発言が重要な役割を果たすことになるからである。少々回りくどかったが、村上春樹が気になる作家の一人であり、それがゆえに彼の発言が小骨のように引っかけたてしまっているのである。そもそも「システム」とはどういう意味なのだろう。システムキッチンだの、システム手帳だの、さまざまな分野でいろいろな使われ方がされているだけに、実例から切り離してしまうとわかりづらい。「システム」とは？とだけ問いかけられると、気の利いた答えは出てこないということだ。それでも、部分と全体のイメージで議論されるものらしいことぐらいは想像できる。

たとえば自動車のパーツであるエンジンやタイヤなどに注目しながら、自動車という商品全体を議論する時に「システム的にバランスが取れて」などのフレーズが自然なように。あるいはこむつかしい経済の話。工場での生産ラインだったり、流通業界の効率主義だったり、はたまた消費の動向などなど、個別に扱ってもそれだけで日が暮れる議論になるのに、そこに加えて相互関係まで目配せすれば「現代の経済システムでは」云々といった発言が飛び出してきたりする。

それはさておき、おもしろいのは、こうした使われ方から、なんとなくの雰囲気はわかって、多くの論者に共通する見解が



豪州時代 2 (’86年10月〜’90年5月)

土田 裕

## 当部の部員のこと

物資木材繊維部の邦人社員は私を含め四名。本店物資部、大阪物資部、本店木材部、大阪繊維部からそれぞれ一名ずつ派遣されていた。

シドニー店で物資部商売を担当していたK君は神戸大農学部出身。毎日、同じ部屋で仕事をしていた関係で否応なく彼のプライベートな問題にも巻き込まれる羽目となった。私より一年前に着任していたので現地には慣れており、社宅への引っ越しを手伝ってもらったり、休みには一緒に釣りに出かけたり、お互いの家へ家族を招待したり、親しく付き合っていた。

ある時、彼が「お婆さんが危篤になったので一時帰国させてほしい」と言ってきたので、すぐさま社長許可をとって帰国させた。その時はなんら疑問を持たなかったのだが、約一か月後、夜遅く彼の奥さんが拙宅へ来て「主人が暴れるので一晩泊めてほしい」と言う。女同士の方が話しやすいので女房が事情を聴いたところ、K君には大阪に彼女がいて、先般、日本に一時帰国したのは彼女に会いに行

を殺し、さらに私たちに他者を冷酷かつ効率的、組織的に殺させ始めるのです」。

もう一つはそれから二年後のことである。福島の原発事故に際して官邸が最前線に介入したことについて、某ニュースキャスターが口にしたコメントである。キャスター氏は、混乱を増幅させたとする批判と被害を最小限に抑える効果があったとされる擁護の両方に触れたうえで、「今回のケースがどうだったというより、対応する人物によって結果が左右されるというのはどうでしょうか。非常時に安定した対応が可能となるシステムの構築が急がれます」といった趣旨の発言をしたのである。

であるように言い、他方は複雑な事態を一義的に解決する必要な手段として「システム」を求めているのである。同じ言葉が正反対のニュアンスで使われているわけだ。多様かつ複雑な内容を含む言葉なのに、雰囲気などところで使えてしまうがゆえに、こうした矛盾が起こってくるのだろう。

村上発言を聞いた直後の印象は、あれあれ、ハルキさん、そんなに単純化していいんですか？というものだった。その据わり悪さが残っているうちに、キャスター氏の発言である。違和感は疑問へと、あるいは不審へと変わった。実際の発言から一部だけを切り出せば、村上発言もキャスター氏の発言も正しそうに聞こえる。しかし両者を並べてみるとどうだろう。村上発言の場合、いくぶんかは文飾的な要素が含まれるにせよ、平たくいえば国家や社会といった体制を「システム」という言葉で表現したものと考えられる。キャスター氏の場合は対応マニュアルを含めてのルール作りのことを言っているのだろう。それぞれの発言ではともに的を射ているようでも、一方は「システム」が人間を押しつぶす悪

あるように思えないことである。いざ立ち止まって考えると「はて、どういう意味だろう？」と頭をひねってしまうことが少なくない。元来は厳密な定義が求められる専門語なのだが、日常的に使われるものだから厳密さが意識されなくなっただけだろう。誰もがわかっているつもりで、軽く「システム」云々と口の端に掛け、そして誰もが厳密なところを曖昧にしたまま、「そうだ、そうだ、システム的にそうなんだ」としたり顔で頷いてしまう。私も、そんな知ったがぶり族の一人だが、そんな私でさえ妙な違和感を覚えたのが村上春樹の発言だった。いや、厳密にいうと、村上の発言と、それからほどなくして聞くことになったとあるフリーズとの合わせ技である。

まず村上春樹の発言から。取り上げるのは二〇〇九年にエルサレム賞を受賞した時のスピーチである。繰り返し報道されていたので有名になった一節だ。スピーチの中で村上は創作時の心がけとして「壁にぶつかって壊れる卵」の比喻を使った上で「たとえ壁が正しくて卵が間違っていたとしても私は卵の側に立つ」と言った。そして比喻の意味するところを、こう述べた。「私たちは皆、程度の差こそあれ、高く、堅固な壁に直面しています。その壁の名前は『システム』です。『システム』は私たちを守る存在と思われていますが、時に自己増殖し、私たち



ったのだという。

彼女と一緒にになりたいので奥さんに「早く日本へ帰れ」と無理を言うらしい。もちろん奥さんはOKしないので、時々大荒れになるのだと。

翌朝、彼が会社へ出勤した頃に、奥さんには家へ帰ってもらい、私は夜、彼をホテルのバーに呼んで事情を聞いた。奥さんを先行帰国させたい理由をなんだ

かんだと説明していたが、全く説得力がない。いわく「女房は二年間の約束でシドニーへ連れてきた。もうそろそろ二年たつので、帰らせたい」という。彼には中二と小五の男の子がいて日本人学校に通っていた。奥さんとは高校時代からの付き合いで、奥さんは「あの人は必ず私のところに帰ってくる」と自信満々にうちの女房に言っていた。

それから一年後、彼の希望通り、家族を先行帰国させたが、本社の人事部は単身赴任を認めず、半年後彼も帰国することになり、シドニー店物資木材繊維部の邦人社員は私だけとなった。

後日談だが、彼が帰国して数年後、件の彼女が他の人と結婚したため、彼は元のさやに納まり、二人の男の子も早婚で孫もできて今はハッピーな人生を送っている。

メルボルン店のO君は本社の木材部からウッドチップ専門で派遣されていた。三井物産木材部は歴史が古く、北海

道を中心に広大な社有林を保有している。昔は相当な利益をあげていたと思う。近年は、日本の森林は間伐材以外は伐採できないため、輸入木材を扱っていたが、これもマレーシアなどの産地が丸太の輸出を禁止し、製材でしか買えぬようになり、採算が合わないため、木材部は社有林の管理に専念していた。

同君は北大農学部林業科出身で木材のエキスパートであった。豪快な性格でタスマニアの山男達とも仲良くなり、現場での様々なトラブルも問題なくこなしていた。タスマニアでの荷役立ち合いは暇な時間が多いので船で釣りをしたり、バーベキューをしてワイルドライフを楽しんでいたようである。三井では珍しく上昇志向がなく、年に一回の人事調査票に次の転勤希望地として鹿児島支店かインドネシアの僻地にあるKTC(製材会社)を挙げていた。実際、三年後にインドネシアに転勤となり山蛭に噛まれながらの二年間を過ごすことになった。

メルボルンで繊維を担当していたH君は京大経済卒、頭脳明晰、如才ないタイプでO君とは対照的な都会人であった。豪州の繊維業界は年中温暖な気候のせいもあって安物志向で、日本製では競争力がなくマレーシア、香港、韓国などからの輸入品を扱っていた。

市場が小さい割に競争が激しく利益率も低かった。彼は大阪支社からの転勤なので次の勤務地に東京本社を希望していたのだが、大阪支社としては後任を大阪から出す関係で大阪へ戻すよう要請あり結局、大阪支店へ帰任した。

元豪州物産社長で後に本社の社長になったE氏の発案で現地の大学生に奨学金を出して日本に派遣し、企業研修を行う三井スカラシップ・プログラム制度があった。毎年十名前後の大学生が日本に派遣されていたが彼らの中で豪物に入社したのは極少数で、私が着任時に残っていたのは二名だけで、それも入社後二〇年位経っており、最近は今全く入社して来ないようであった。

これは他の海外店にも言えることであるが、現地職員と邦人職員の職制が異なり、彼らは部長などの幹部職になれないからである。豪物社長の権限で前述の二名は名前だけは業務部長として処遇していたが、営業ではないので権限もなく、毎日、豪州の有力紙の経済記事を抜粋して営業部に配信するのが主な仕事のようにあった。

月に一回、大洋州部長会議が開かれ、豪州四店だけでなくニュージーランド物産社長、パプアニューギニアのポートモレスビー所長(英国人)なども出席していたが、社長がS氏からT氏に代わってから、前述の現地人部長のために会

議は全て英語でやろうということになり、日本人同士が英語で議論するという妙な雰囲気会議となった。

現地職員については、シドニーのピーター・アーバークロンビーとメルボルンのウィル・マーカリンクが記憶に残っている。特にマーカリンクはオランダからの移民で松下のコンプレッサー担当であったが、なかなかの商人で松下が度々値上げを申し入れてきて、商売継続が危なくなつたときも粘り強く交渉して注文をとっていた。人懐こい性格で私は買っていたのだが、私の帰国後数年してある不祥事で会社を辞めたと聞いた。

ピーターはBSタイヤ、コンベアーベルトクリナーの担当であったが、両方とも特定の客先向けしか商権がなくじり貧であった。さりとて開発商売を担当する能力もなく、物産の海外店にはよく居るタイプであった。彼は後に私が大阪の物資部長だった時に豪物を辞めてコンベアーベルトクリナーの代理店に転職し、日本に出張してきた。

